

# 浄瑠璃本の仮名表記

## 『曾根崎心中』について

田中美樹

はじめに

中世の歌論書のひとつに『和歌大綱』がある。『和歌大綱』では、仮名の用法について「先かんなをかくべき様をしるべし」と「かきたがへてあしかるべきかんなの事」の二つの項に分けて述べられている。特に後者では「上にかゝぬ二」「上下わかぬル・に」「下にかゝぬ本」「上下わかぬほ」などの四〇項目があげられており、いわゆる文字遣いについて述べられている。『和歌大綱』にみられるこれらの規則は、和歌だけにとどまらず、当時の人々の間に「上に書かない仮名」「下に書かない仮名」というように、多種にわたる仮名の字体を、位置によって書き分けるという意識があったことを示すものといえるであろう。

では、近世に於いてはどうであったのだろうか。江戸時代になると初期に整版が行われるようになった。それによって、それまでは公家や武士・僧侶など一部の人々だけのもの

のであった文字が、町人の間にも広く普及するようになった。しかし、まだ町人の教養は公家や僧侶などの知識階級に比べると、あまり高くなかったのではないかと考えられるので、版本の表記についても、読みやすいように何らかの工夫がなされていたのではないかと思われるのである。よって、近世の書物を調査することにより、近世に於いても仮名を使い分けるといふ意識があったのかどうかを考えたい。

今回は、声に出して読まれるという点において、読本と比べてより工夫がなされていると思われる浄瑠璃本の中から『曾根崎心中』を取りあげ、近世の文字表記の状況がどのようなものであったかを明らかにするとともに、仮名の使い分けの特徴について考察していきたい。

本論

### 第一章 曾根崎心中の諸本について

今回の調査では、森修氏編による『影印本曾根崎心中』を

使用した。本章では、「曾根崎心中」の諸本について述べる。

本書の解題に拠ると「曾根崎心中」は、元禄一六年（西暦一七〇三年）に竹本座に於いて「日本王代記」の切狂言として上演されたのが最初である。竹本座の「曾根崎心中」が大成功を収めるのにともない、浄瑠璃・歌舞伎界では増補および改作が多く行われるようになった。よって諸本も多くあり、「曾根崎心中」の諸本には以下のものが挙げられる。

- (一) 六行四十三丁本—細川景正氏蔵 森修氏蔵
- (二) 八行二十五丁本—大阪府立図書館蔵
- (三) 八行二十六丁本—東洋文庫蔵 山口大学蔵
- (四) 八行二十四丁本—現存未詳
- (五) 八行三十三丁本—天理図書館蔵 横山正氏蔵
- (六) 八行二十四丁本—早稲田大学蔵 平兵衛版
- (七) 八行二十四丁本—天理図書館蔵 奥書欠
- (八) 八行二十四丁本—大阪府立図書館蔵 山本版
- (九) 七行三十八丁本—天理図書館蔵

大阪大学国文研究室蔵

- (十) 十二行十六丁本—東京大学国語研究室蔵

これらの諸本のうち、(二)で挙げた八行二十五丁本は、正本屋山本が(一)の六行本を八行本として出版したものであり、以後「曾根崎心中」の多くは八行本によって流布するようになった。(二)はその八行本最初の版として、本書の底本と

なっている。従って、今回の調査の対象は、大阪府立図書館蔵八行二十五丁本である。

## 第二章 仮名

### 第一節 仮名の実態

平安時代以降、現在に至るまで仮名には平仮名と片仮名が存在している。本書に於いては、一部の感動詞に片仮名が使用されているものの、平仮名が中心に使用されている。

もともと仮名は万葉仮名から発生したものである。初め、万葉仮名の略字または略草体であったものを、さらに略することによって万葉仮名から独立したものが平仮名であり、日本語を写すための独特の音字である。

万葉仮名は数え方によっても多少異なってはくるが、その数は約一〇〇〇種ともいわれている。<sup>註1)</sup>従って、仮名には多くの異字体が発生することになった。

そこでまず、本書の仮名を調査するにあたり『文字及び假名遣の研究』の「平假名諸體及び字源表」を使用して、平仮名の異字体数を調べる。

調査の結果は表1のとおりである。

表 1

さ	こ	け	く	ぎ	か	お	え	う	い	あ
左・佐・散・斜・狹・沙・作・乍・差	己・古・故・許・期・胡・興	計・个・遣・希・氣・稀	久・具・九・求・俱・供	幾・支・起・貴・木・喜・期・季・記 佳・霞・坎・荷	加・可・歌・哥・譚・閑・家・香・賀・駕・我・嘉	於	衣・江・要・盈・得・緣	宇・有・雲・石・羽・鶉・憂	以・伊・移・意・異	安・阿・愛・惡

も	め	む	み	ま	ほ	へ	ふ	ひ	は	の
毛・裳・母・茂・藻・无	女・免・面・馬・目・妻	武・無・牟・舞・務・夢・无	美・見・三・微・身・民・薇	末・万・萬・真・滿・間・馬・麻・漫・摩	保・本・報・寶・奉・穗	部・遍・篇・邊・偏・倍・敵・幣・弊・經・變・辨	不・布・婦・風	比・飛・悲・非・日・火・避・妣	波・者・盤・八・頗・半・葉・破・婆・芳・羽	乃・能・農・濃・廼・野

ね	ぬ	に	な	と	て	つ	ち	た	そ	せ	す	し
彌・年・念・音・寝・根・熱	奴・怒・努・駕・沼	仁・尔・耳・丹・二・兒・而	奈・那・難・南・名・菜	止・登・東・度・土・等・斗・刀・徒・戸・砥・兎	天・帝・轉・傳・亘・侶・亭	川・津・徒・都・頭	知・地・遲・千・致・智・池・馳	太・多・堂・當・他・田	曾・楚・所・處・蘇	世・勢・聲・須	寸・春・須・數・壽・受	之・志・事・新・師・斯・四

を	ゑ	ゐ	わ	ろ	れ	る	り	ら	よ	ゆ	や
遠・越・乎・惡・緒	惠・衛	為・井・遣・居・委・威・渭	和・王・倭・輪・○	呂・路・露・樓・婁・侶・論・盧	礼・連・麗	留・流・類・累	利・里・梨・理・離・李	良・羅・蘭	与・餘・余・世・代・夜・容	由・遊・游・柚	也・夜・耶・屋・哉・移

表1によると、異字体は全部で三〇五種あり、一つの仮名に對し多いもので一六種、平均して六種の異字体があることが解った。

以上のことを踏まえた上で、仮名使用の変遷をみるとともに、本書に於ける仮名使用の状況について考察していきたい。

### 第二節 『曾根崎心中』に於ける仮名の使用状況

『曾根崎心中』にみられる仮名の使用状況を表2にあげる。調査の結果は異なり字数七三字、延べ字数九六三〇字であった。

異字体にはへしとへ志のような異字母由来のものとへいとへ以のような同字母由来のものとがあるが、同字母由来のものには問題とすべきものはみられなかった。よって今回の調査は異字母由来のものである。

また、本文の平仮名のみを調査の対象とし、内題・奥書にみられるものについては全て対象外とした。

表2 比率(%)

き		か		お	え	う	い	あ		仮名
起	幾	可	加	於	衣	宇	以	阿	安	字母
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	字体
101	144	522	10	77	23	249	280	1	179	字数
41.2	58.8	98.1	1.9	100	100	100	100	0.6	99.4	比率
せ	す		し		さ	こ	け		く	仮名
世	春	寸	志	之	左	己	个	計	久	字母
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	字体
125	131	2	196	255	228	246	50	103	241	字数
100	98.5	1.5	43.5	56.5	100	100	32.7	67.3	100	比率
と	て	つ				ち	た		そ	仮名
止	天	頭	徒	津	川	知	當	多	曾	字母
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	字体
491	322	1	3	2	276	130	1	337	117	字数
100	100	0.3	1.1	0.7	97.9	100	0.3	99.7	100	比率

は	の			ね		ぬ	に		な	仮名
波	之	能	乃	年	禰	奴	仁	尔	奈	字母
は	い	れ	の	ひ	ぬ	ぬ	に	ふ	な	字体
3	8	243	158	33	27	68	33	248	363	字数
0.7	2.0	59.4	38.6	55.0	45.0	100	11.7	88.3	100	比率

ま		ほ	へ	ふ	ひ		は			仮名
満	末	本	部	不	飛	比	盤	八	者	字母
ぬ	ま	か	へ	ふ	む	ひ	ま	は	え	字体
24	158	86	119	176	3	169	10	186	253	字数
13.2	86.8	100	100	100	1.7	98.3	2.2	41.2	55.9	比率

よ	ゆ	や		も		め	む	み		仮名
与	由	屋	也	母	毛	女	武	身	三	字母
よ	ゆ	や	や	も	も	め	む	み	み	字体
128	63	3	236	3	264	93	52	3	109	字数
100	100	1.3	98.7	1.1	98.9	100	100	2.7	97.3	比率

ゐ	わ		ろ	れ		る	り		ら	仮名
為	王	和	呂	連	礼	留	里	利	良	字母
ゐ	わ	わ	ろ	れ	れ	る	り	り	ら	字体
24	56	56	57	60	201	163	16	195	208	字数
100	50.0	50.0	100	23.0	77.0	100	7.6	92.4	100	比率

ん	を	ゑ	仮名
死	遠	惠	字母
ん	を	ゑ	字体
236	179	4	字数
100	100	100	比率

表2を細かく分析してみると次のようになる。

(1) 字母を一種とするもの 二七種

(2) 字母を二種とするもの 一六種

ゑ(惠)・を(遠)・ん(死)  
 る(留)・ろ(呂)・ゐ(為)  
 ゆ(由)・よ(与)・ら(良)  
 ほ(本)・む(武)・め(女)  
 ぬ(奴)・ふ(不)・へ(部)  
 て(天)・と(止)・な(奈)  
 さ(左)・せ(世)・そ(曾)  
 お(於)・く(久)・こ(己)  
 い(以)・う(宇)・え(衣)

あ(安阿)・か(加可)・き(幾起)  
け(計个)・た(多當)・に(尔仁)  
ね(禰年)・ひ(比飛)・み(三身)  
も(毛母)・や(也屋)・り(利里)  
れ(礼連)・わ(和王)

(3) 字母を三種とするもの 二種  
の(乃能之)・ま(末満間)

(4) 字母を四種とするもの 二種

つ(津川徒頭)・は(波者八盤)

さらに字母を二種以上とするものについて分析してみる。

① 数種のうち一種が頻用されているもの(但し、比率が八〇・〇%以上のものとする) 一二種

あ(安)・か(可)・す(春)

た(多)・つ(川)・に(尔)

ひ(比)・ま(末)・み(三)

も(毛)・や(也)・り(利)

② ほぼ同比率で用いられているもの 四種

き(幾起)・し(之志)・ね(禰年)

わ(和王)

③ その他 四種

け(計个)・の(乃能之)

は(八者波盤)・れ(礼連)

以上からまず、近世に於いては全体の異字体の数がかなり減少していることが解る。しかも仮名一つに対して六種程度あった字母も、二種程度になっている。

字母を一種とするもの二七種のうち「ほ(本)」を除いた二六種は、すでに現在の平仮名と字母が同じである。また、字母を二種以上とするものであっても一種が頻用されているものに関しては、現在のものと字母が同じであるものほど比率が高くなっている。よって、これらの仮名については、ほぼ一つの字体に決定される方向にあったといえるだろう。

字母を一種とするものには、問題とすべきものがみられなかった。よって今回の調査は②③に挙げられる仮名および、④に挙げられているもののうち、他方がある程度以上の割合を示している仮名を対象とし、それぞれが本書に於いてどのように使い分けられているかを考察していく。

本書の調査を行うにあたっては、以下の四点を着眼点とする。

(1) 語頭および語中語尾の問題

(2) 行頭および行末の問題

(3) 前後左右の文字との関係

(4) 特定の音韻および単語との関係

これらを念頭においた上で、次章に於いて本書の文字遣

いについて考察していく。

### 第三章 文字遣い

#### 第一節 「し」について

「し」には〈し〉を字母とするものと、〈志〉を字母とするものがあげられる。本書に於ける「し」の使用状況は表3のとおりである。本書に於いては〈し〉が二九五字、〈志〉が一七二字使用されている。

〈志〉に関しては七二・七％にあたる一二五字が語頭に、そして残りの四七字が行頭六つを含む語中語尾で使用されている。一方、〈し〉に関しては九九・〇％にあたる二九

字母位置	之	志
語頭	3 1.0%	125 72.7%
語中語尾	292 (行頭1つ含む) 99.0%	47 (行頭6つ含む) 27.3%
計	295 100%	172 100%

二字が語中語尾で使用

されており、語頭にはわずかに三字しか使用されていなかった。従って、分布位置の特徴として、〈志〉は主として語頭および行頭に、〈し〉は行頭以外のあらゆる位置で使用される傾向にあるといえる。

玉村貞郎氏は、〈志〉

と〈し〉の関係について、

〈し〉は行頭を除く文節のあらゆる位置に、〈志〉は行頭及び文節頭に使用される傾向がある。この傾向は、時代に隔りはあるものの、『和歌大綱』（日本歌学大系 本に拠る）の「上下わかぬし」「下にかかぬ志」の指摘に一致するものだと云える。<sup>注2)</sup>

と述べておられるが、本書に於いてもその指摘が成り立つといえるであろう。

また、サ変動詞連用形「し」に関しては、〈し〉と〈志〉の両方が使用されているが、これらに於いての明確な特徴は見出せなかった。

#### 第二節 「わ」について

「わ」には〈王〉を字母とするものと、〈和〉を字母とするものがある。本書に於ける「わ」の使用状況は表4のとおりである。本書に於いては〈王〉〈和〉ともに五六字使用されている。

〈王〉に関しては主に語頭に使用される傾向がみられ、その比率は〈王〉に於ける全字数の九四・六％にあたる。一方、〈和〉については全て語中語尾で使用されており、語頭に使用された例はなかった。

また、〈和〉が使用されている語については次の場合に



表4

字母位置	王	和
語頭	52	0
	94.6%	0%
語中語尾	4	56
	5.4%	100%
計	56	56
	100%	100%

分けることができた。

(1) 漢語の開拗音を

表す場合

くわんぜおん

(観世音)・く

わんおん(観音)・

二くわんめ(二

貫目)

ぐわん(願)・

よくわん(余巻)

志うぐわんじ

(重願寺)・くわいちう(懷中)・こうくわい(後悔)

(2) 八行四段活用動詞の未然形活用語尾をワとしたもの

いわせ(言はせ)・いわず(言はず)

いわぬ(言はぬ)・いわるる(言はるる)∴

(3) 擬態・擬声語

ぐわら・くわっと∴

(4) 終助詞

ゝわい・ゝわいの

以上の四つの場合では、へ和に限って使用されていた。

終助詞の「ゝわい」などについては、語頭と考えることも

できるが、常に他の語に付属して使用されるものであるから、語中語尾で使用されているものと考えた。

以上の結果から「わ」に関しては、明確な使い分けがなされていると言えるだろう。

第三節 「は」について

語中語尾で使用される「わ」に関連して、「は」の使用状況も問題となると思われる。よって、本節では「は」の使用状況について考察する。

「は」の字母については最も多く、へ八 へ者 へ波 へ盤の四種があげられる。この四種がどのように使い分けられているか、それぞれ考察する。

まず へ八 は助詞の「は」に限って使用されており、その他の「は」を表す場合には、ほとんど へ者 が使用されている。つまり、「は」については、数字からみても解るように へ八 と へ者 の二種が主に使用されているといえる。よって へ波 と へ盤 は例外として挙げることができ

る。そこで へ波 と へ盤 の使用されている例について考えてみる。

(1) へ波 について 三例

① わたす銀なればやうもどして

(三四頁八行目)<sup>註3)</sup>

㊸物をいはずればはしご／の下に

(五四頁七行目)

㊹はたとけせ／ばはしごより

(五五頁三行目)

右にあげた三例が〈波〉が使用されている例である。これは全て、直前の「は」に〈者〉が使用されている。そのため、同字体が続くことを避ける目的で〈波〉を使用したと考えられる。

(2) 〈盤〉について 一〇例

㊺身ども方へ／はふとどきして

(三六頁六行目)

㊻銀をとらふとは／ばうはんんに

(四〇頁一行目)

㊼ありさまはめもあてられぬ

(四四頁八行目)

㊽せけんにわるいはさたがあり

(四八頁三行目)

㊾いさけはお／きやのんできた

(四九頁三行目)

㊿下女は／ねむそにめをすりく

(五五頁七行目)

㊿むかふの二かい／はなにやとも

(五八頁二行目)

㊿うきなはずてじ／と心がけ

(六三頁五行目)

㊿さいごもあんずることはなし

(六三頁八行目)

㊿とゝさまかゝさまはまめで

(六六頁一行目)

右の一〇例が〈盤〉が使用されている例であるが、これらは全て助詞の「は」である。さらに一〇例のうち三例が行頭に、一例が行末に位置している。行頭に位置する助詞の「は」には、〈八〉は一例も使用されていなかった。従って、行頭に位置する助詞の「は」に関しては〈盤〉だけが使用されるといえる。行末に位置するものに関しては〈八〉が使用されている例も一五例がみられるので、関係はあまりないと思われる。残りの例に関しては、明確な特徴は見出せなかった。

また接続助詞の「ば」を含む濁音「ば」に関しては、〈八〉と〈者〉しか使用されていなかった。次いで半濁音に関してであるが、本書には半濁音表記はみられない。しかし、半濁音「ば」を表すと思われる次の例には全て〈者〉が使用されていた。



第五節 「き」について

「き」には〈起〉を字母とするものと、〈幾〉を字母とするものがある。本書に於ける「き」の使用状況は表7のとおりである。本書に於いては〈起〉が一〇一字、〈幾〉が一四四字使用されている。〈起〉は語中語尾で使用されており、語頭で使用されている例はわずか一例であった。

また、語中語尾で使用されている一〇〇字のうち八三字が

表7

字母位置	起	幾
語頭	1	83
	1.0%	57.6%
語中語尾	100	61
	99.0%	42.4%
計	101	144
	100%	100%

語尾で使用されていた。よって〈起〉は主に語尾で使用される傾向にあると言える。一方、〈幾〉に関しては、語頭・語中語尾どちらにも使用されており、あらゆる位置で使用される傾向にあると言えるだろう。

第六節 「れ」について

「れ」には〈礼〉を字母とするものと、〈連〉を字母とするものがあげられる。本書に於ける「れ」の使用状況は

表8

字母位置	礼	連
語頭	0	5
	0%	8.4%
語中	46	23
	22.9%	38.3%
語尾	155	32
	77.1%	53.3%
計	201	60
	100%	100%

表8のとおりである。本書に於いては〈礼〉が一〇一字、〈連〉が一五五字が語尾で使用されている。よって、〈礼〉は主に語尾で使用される傾向にあるといえるだろう。

一方、〈連〉は語頭・語中語尾どちらにも使用されており、あらゆる位置で使用される傾向にある。一方、〈礼〉は語中語尾のうち語中と語尾に關してもあまり大きな差異はみられなかった。語頭で使用されている例は比較的少ないが、主に語中語尾で使用される傾向にあるとも断言できない。よって〈連〉に關してはあらゆる位置で使用されると言えるだろう。

第七節 「け」について

「け」には〈へ〉を字母とするものと、〈計〉を字母とするものがある。本書に於ける「け」の使用状況は表9のとおりである。本書に於いては〈へ〉が五〇字、〈計〉が一〇三字使用されている。

表9

字母位置	計	へ
語頭	2	38
	1.9%	76.0%
語中語尾	101	12
	98.1%	24.0%
計	103	50
	100%	100%

〈計〉は九八・一％にあたる一〇一字が語中語尾で使用されており、語頭に於いて使用されている例はわずかに三例しかなかった。

一方、〈へ〉に関しては、七六・〇％にあたる三八字が語頭に、二四・〇％にあたる二二字が語中語尾で使用されている。よって、分布位置の差異として〈計〉は語尾に、〈へ〉は主として語頭に使用される傾向にあると言えるだろう。

第八節 「の」について

「の」の字母には〈能〉〈乃〉〈之〉の三種があげられる。

〈之〉は代名詞「その」に限って使用されていた。

〈能〉〈乃〉についてはであるが、本書に於いては〈能〉が二四三字、〈乃〉が一五八字使用されている。〈能〉に関しては九六・三％にあたる二三四字が助詞の「の」であった。

一方、〈乃〉に関しては、五〇・〇％にあたる七九字が助詞の「の」であった。行頭に位置する助詞については、〈乃〉が使用されており、〈能〉が使用されている例はわずかに一例であった。よって、助詞の「の」には主に〈能〉が使用され、〈乃〉は行頭に位置する助詞、およびあらゆる語に使用される傾向にあると言えるだろう。

〈乃〉が行頭以外の助詞「の」に使用されている例は次のとおりである。

- ①か能あぶらや乃九平次があと能月乃。(三五頁二行目)
- ②志やうちき能ころ乃そ能。(四四頁三行目)
- ③こん志やう能かね乃／びびき能。(五七頁三行目)

以上より、助詞の「の」に関しては、類出の助詞であるために、同字体が近接することを避ける目的で〈能〉と〈乃〉の両類を使用したと思われる。

第九節 「ま」について

「ま」には〈末〉を字母とするものと、〈満〉を字母とするものがあげられる。本書に於いては〈末〉が一五八字、〈満〉が二四字使用されている。

〈満〉に関しては全て「さま」という語に使用されていた。一方、〈末〉に関しては、「ま」に於ける〈末〉の比率は八六・八%と高く、使用位置についてもあらゆる位置で使用されている。よって「ま」については、主に〈末〉が使用されるといえる。

従って、「ま」に関しては、〈満〉が「さま」の一語に限って使用される以外は〈末〉が使用されると言える。

第十節 「り」について

「り」には〈利〉を字母とするものと、〈里〉を字母とするものがあげられる。本書に於ける「り」の使用状況は表10のとおりである。本書に於いては〈利〉が一五八字、〈里〉が一六字使用されている。

〈利〉は全て語中語尾で使用されており、語頭で使用されている例は一例もなかった。

一方、〈里〉に関しては、四三・七%にあたる七字が語頭で使用されている。さらに、三字が行頭に位置していた。

表10

字母位置	利	里
語頭	0 0%	7 (行頭1つ含む) 43.7%
語中語尾	185 100%	9 (行頭2つ含む) 56.3%
計	185 100%	16 100%

〈利〉が行頭に於いて使用されている例は一例もなく、行頭に位置する「り」については、〈里〉だけが使用されると言える。

また、語中語尾で使用されている〈里〉九例のうち、行頭の二例を除いた七例について考える。七例のうち五

例については、「ありや(ありゃ)」「こりや(こりゃ)」などの拗音に使用されていた。残りの「れん里(連理)」「(二例)については、不明であった。

以上の結果から、〈利〉は語中語尾に、〈里〉は行頭と語頭、および拗音に使用される傾向にあると言えよう。

おわりに

以上、大阪府立図書館蔵八行二十五丁本を底本とする『影印本曾根崎心中』を対象として、近世の文字遣いを中心に考察してきた。

まず近世に於いては異字体の数が、かなり減少していた。

しかし、字母を二種以上とするものについては使い分けに何らかの特徴がみられた。

使い分けに特徴がみられる仮名については、使用位置に制限のあるものがほとんどであり、語頭もしくは語中語尾のどちらかに限って使用される傾向があった。

主に語頭に於いて使用されるものとしては、〈王〉〈志〉〈禰〉〈計〉〈里〉があげられる。ただし、〈志〉および〈里〉に関しては、語頭だけでなく、行頭に於いても使用される傾向にあった。

語中語尾に於いて使用されるものとしては、〈和〉〈年〉〈个〉〈利〉があげられる。ただし、主に語尾で使用されるものとしては、〈起〉があげられる。

語頭・語中語尾問わず、あらゆる位置に於いて使用される傾向にあったものとしては、〈之〉〈幾〉〈連〉〈末〉があげられる。ただし、〈之〉に関しては行頭では使用されていなかった。

それぞれの使用位置については表11のとおりである。特定の語で使用されるものとしては、「その」に限って使用される〈之〉と、「さま」に限って使用される〈満〉の二つがあげられる。

その他、「は」に関しては音韻の違いによって使い分けがなされていた。「の」に関しては、「の」が頻出の助詞で

表11

位置 仮名	語頭	語中	語尾
し	○	○	○
志	○		
わ	○		○
ね	○		○
き	○	○	○
れ		○	○
け	○	○	○
ま	○	○	○
り	○	○	○

あることから数も多いために、視覚的な変化をつけることを目的とした使い分けと考えられた。

また、主に語頭で使用されるものが、語中に於いて使用されている場合についてであるが、これは書き手がどこまでを一つの意味のまとまりとして、認識していたかの違いであると思われる。よって、常に使い分けが一定であるとは言えないようである。

以上が調査の結果である。しかし、今回の調査は本書一つのみを対象とし、諸本との比較にまで至らなかった。よって、本書にみられる仮名の使い分けの特徴が「曽根崎心中」全体に於ける特徴とは言えない。しかし、本書に於いては、ある一定の規則に基づいて文字が選択・使用されており、近世に於いてもなお、仮名を使い分けるといふ意識があったと言えるだろう。

注

- (1) 『仮名遣と上代語』大野晋氏（岩波書店）による。
- (2) 『春色梅兒譽美』における仮名の用字法（『国語文字史の研究二』和泉書院）
- (3) 本論中に於ける頁数および行数は全て、『影印本曾根崎心中』（新典社）の頁数、行数による。
- (4) 橋本進吉氏の定義による。『文字及び假名遣の研究』（岩波書店参照。）